Research Institute for World History
Newsletter
No. 23 July 2014

CONTENTS

特集 第一次世界大戦論の現在
■「サライェヴォ事件 100 年」
増谷 英樹 —— 1 頁
■「文献紹介　最近の第一次世界大戦研究から」
木村 真 —— 8 頁
■「〈雑感〉アジアにとっての「第一次世界大戦」」
南塚 信吾 —— 10 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/
世界史研究所「ニューズレター」第 23 号（2014 年 07 月）

特集 第一次世界大戦論の現在

開戦 100 年にあたる本年、世界各地で、様々なメディアを通じて、あるいは何らかのイベントのかたちで、第一次世界大戦が取りあげられている。もちろん、歴史学の分野でも、100 周年をひとつ契機として、この戦争の意味を問い直す試みが行われ、多様な対象や方法によって、その成果が提示されている。以下では、その一端を紹介する。世界史の研究や教育の一助となれば幸いである。

サライェヴォ事件 100 年

増谷 英樹

サライェヴォ事件と第一次世界大戦の現代的意味

ウィーンにやってきて 3 週間ほどが過ぎた 6 月 28 日．この日は，ここでは誰もが思い出すサライェヴォ事件の日であり，今年はまさにサライェヴォの暗殺事件とそれに引き続く第一次世界大戦の 100 年の「記念日」である．テレビや新聞，人々の話題は現在おこなわれているサッカーのワールドカップに集中し，サライェヴォ事件にたいする関心は，一部の人々に限られているが，それでも本屋には 100 周年記念の書籍が，新刊書籍の机一杯に並べられ，当日の新聞はどれもが特集を組んで，専門家のインタヴューや分析を載せていた．それらを全て分析して読むことは不可能であるが，とくに事件の当事者的位置を占めるウィーンにおいてこの歴史的事件がどのように記録ないし記憶され，100 年後にどのような位置と意味をあたえられているか，歴史家としては興味のあるところである．当日の新聞紙上の議論と関連書籍のなかから新たな位置づけを試みているいくつかを簡単に紹介しておきたい．

この 1 週間および 6 月 28 日当日の新聞のなかで，中間色の濃い『デア・スタンダート』紙は，ベルリンのフ

ンボルト大学のヘルフリート・ミュンクラーの「第一次世界大戦への新たな視角」と言う記事を載せ，第一次世界大戦のヨーロッパ全体における歴史的位置付けを再確認している．以下にミュンクラーの整理に多少筆者の見解を加えて，整理してみた．

ヨーロッパ，とくにドイツ語圏においては第一次世界大戦への関心や記憶は，第二次世界大戦の記録および記憶によって覆い隠され，人々の集団的記憶の中で占める位置は極めて小さくなっていると，ミュンクラーは述べる．それは，第二次世界大戦における犠牲者が，フランス，イギリスとは逆に，ドイツ語圏においては第一次大戦における犠牲者よりもはるかに多いという事実だけではなく，この記憶をささえる歴史の証言者がほとんどいなくなってしまったと言う現実によるものでもある．そうした，歴史的距離の拡大によって歴史的記憶や記録のあり方，歴史的描写の描き方がどのように変わり，どのような歴史的史料を使い歴史を再構成しなければならなくなっているかについては後述するが，ミュンクラーは，第一次世界大戦を歴史的に分析することは，四つの側面から今なお必要であると述べる．第一に，現在までのヨーロッパ世界の発展において第一次世界大戦は第二次世界大戦を含めたその後のヨーロッパの発展に根底的な影響を与えているからであるという．というのは，この戦争がなければ，ムッソリーニもヒトラーも現われなければ，レーニンもスターリンも権力を握ることはなかったであろう．そしてヨーロッパは何百万という膨大な人員を失うことなく，社会的，文化的にヨーロッパはまったく異なる歴史を持ったであろう．またこの戦争はヨーロッパ人の文化的自己認識に大きな変化をもたらしただけではなく，権力・暴力のあり方，武器の発展，そのための産業の発展など，これまでの戦争では考えられないほどの大きな転換を創り出したのである．それは第二次世界大戦さえもしのぐほどのおおきな転換であったと，ミュンクラーは述べる．

第一次世界大戦がその後の歴史の流れを規定したことは確かであり，大戦が社会的文化的に大きな転換であったことは言うまでもないが，ミュンクラーが強調するのはその社会政治的側面であり，戦争により国家は大量の国民とくに家庭の扶養者ないし社会的生産者を戦争に狩り出し，その多くを障害者として家庭，社会にもどすことになった．戦後，国家はそうした家庭や社会の扶養者としての役割を自ら担わねばならなかった．戦争中の新たな税制度は戦後の社会国家の財政的基盤となり，戦中の連帯意識は戦後の復興の精神的基盤を形成した．大戦前にはヨーロッパの国家は極めて小さな役割しか果たしていなかったが，第一次世界大戦中の戦争政策によって大きな社会国家への道が開拓されたのだという．この社会国家論は，1980-90 年代に第二次世界大戦と戦後の評価を巡っておこなわれた議論の一つであり，ミュンクラーはそれを第一次世界大戦にまで戻して考えてみようとしているといえよう．

ミュンクラーが主張する第二の点は，中東欧および中近東の政治体制の問題である．この地域では戦争の結果、多民族・多宗教帝国の解体をもたらし，それに代わって全てではないが，安定した体制が成立したように見えた．しかし実際にはまったく逆で，それぞれの（国民国家の）体制下ないし旧帝国領でもエスニックな対立や宗教的紛争はむしろ増大した．そして我々はたとえばバルカン半島やコーカサスでどうしたら安定した秩序を創り保つことができるかという解決不能な問題を抱えている．シリアやイラク（そしていまやウクライナ）でも同様である．それらは第一次世界大戦の陰でヨーロッパの周辺部での実際の戦争中に起こっていた紛争の再開なのであるという．

そして第 3 の問題は，ヒトラーなどのシステムの戦争は協議や交渉では阻止できなかったが，1914 年の戦争はどうにか回避できた可能性があり，それがどうして阻止できなかったと言う問題は，検討の価値があるというものである．それは一連の失敗や幻想の結果、勃発にいたったのであり，そのことを分析する価値はあるというのである．第一次大戦の運命論は運命論的結果をもたらしたからであるという．

運命論の問題は戦争責任問題の転換と繋がる．それがミュンクラーの主張する第 4 の問題である．これまで，

戦争を望んだのは誰かが特定され，その人物に責任が負わされた．しかしもし責任者が多数存在し，彼らが夢遊病者のように戦争に突入し，それをコントロールしたとすれば，問題は異なるし複雑化し，問題はこれまでと異なってくるというのがミュンクラーの意見であるが，正直，ドイツにおける現在の戦争責任論争に疎い筆者には，判りにくい．しかし，結論としてミュンクラーが述べていることは極めて現実的である．「1914 年に比べ，今日ヨーロッパにおいては戦争に結びつくような対立は存在しない．しかし不安定な周辺や辺境においてはその恐れはまだ存在する．1914 年の夏に関する問題に取り組むことは，こうした一見辺境と見られる紛争を過小評価してはならないことを示している.」勿論ミュンクラーの頭にはウクライナの問題もあるであろう．

同じく『デア・スタンダート』紙は，この 2、3 日前に，「研究スペシャル」のページで「第一次世界大戦はなぜ回避できなかったか」と言う問題に焦点をあわせ，『平和条約に終わった戦争．1914 への道』の著者であるマーガレット・マクミランへのインタヴューを試みている．インタヴューは「第一次世界大戦は避けることが出来たか」，「なぜ，戦争はおきてしまったか」と言う問題から現代史の理解の仕方に拡大していき，マクミランの返答は示唆に富んでいるので，議論を要約的にまとめてみよう．

1)「ヨーロッパはなぜ戦争を避けえなかったのか？」と言う質問に対し，マクミランは次のように答える．

——「戦争は必ずしも必然ではなかった．（当時）平和を望んだ勢力は同じぐらい存在した.」「なぜ，戦争がはじまってしまったかを説明するのは簡単である。しかし，各国において，戦争を推進しようとした勢力がどの程度いたかが問題である.」

2)「戦争を避けることは可能であったか？」

——「可能でした．ヨーロッパは既に，いくつかの危機を乗り越えてきていた．モロッコ問題，ボスニア問題，バルカンを巡る対立において，ヨーロッパは戦争を回避してきた．1914 年もそれは可能であった .」

3)「1914 年はなぜそれらと違ったのか？」

——「当時は戦争を避けることが出来たという自己満足感と安心感が支配していた．フランツ・フェルディナントが暗殺されたとき人々は，これはこれまでの危機の続きであると考え，過去の成果に安住していた．当時は強がってみせ，他国を軍事的に脅すことは当たり前のことで，それが拡大していった.」

4)「そのとき住民はどうしていたか，彼らも圧力に加担していたか？」

——「多くの国では支配エリートは，下からの革命が起きることを心配していた．彼らにとっては，戦争は社会を強く団結させ，住民をより強い愛国者にしていく一つの可能な手段であった．例えばドイツでは，戦争は社会主義者に打ち勝つ口実でもあった．ドイツの多くの歴史家たちは，民族主義の圧力を戦争の要因と考えている.」

5)「他の国々ではどうでした？」

——「ロシアでは，さらに譲歩し弱みを見せることをしないと決意していた．ロシアが譲歩しセルビアを助けなければ，強国としてのロシアの地位は失われるであろうと考えていた．オーストリアの指導層にとってはセルビアを叩くチャンスであった.」

6)「フランツ・フェルディナントの暗殺はオーストリア＝ハンガリー帝国にとって戦争を始める絶好の口実であったのですか？」

——「そうです．暗殺は戦争の可能性を増大させた。政府は戦争を始める決意で，参謀長のヘッツェンドルフは，暗殺以前にセルビアとの戦争について発言していた．ドイツはオーストリアにどんな場合でも支持するとの白紙委任状を与えた．それは当然，危険なものであった.」

7)「しかし攻撃的なものだけではなかったのでは？ ドミノ的現象があったのか？」

——「ほとんどの国が，当時戦争計画を持って準備しており，戦争を彼らの目的のために利用しようとして

いた。そして 7 月危機のなかでオーストリアがドイツとロシアを戦争に引き込んだ.」

8)「第一次世界大戦がそれ以前の戦争と異なっていたのはなんでしょうか？」

――「その影響力が極めて大きかったことでしょう. それは世界戦争であり，ヨーロッパ，アジアそして極東においても戦われた．その破壊力は莫大なものであり，例えばナポレオン戦争と比べてもはるかに多くの犠牲者を出した．何百万の死者, 膨大な出費を伴った. それはまた最初の産業化された戦争でした.」

9)「その産業化された戦争は毒ガスの使用にも見られます.」

――「18 世紀にはヨーロッパはその国民をよりよく扶養し，その生活を維持するようになりましたが，同時にヨーロッパは彼らを殺す方法でも進歩したのです．それは歴史の皮肉です.」

10)「歴史家エリック・ホブズボームは 20 世紀を『極端の時代』として描きました．第一次世界大戦を導いたのはその極端さだったのでしょうか？」

――「ヨーロッパは（極端に）変わりました．国民は強力になり，歴史の前面に出てきた．多くの人々が自分たちをもはや（国家に）従属しているとは感じなくなり, より多くの人々が選挙に参加できるようになり, 戦争はもはやある軍隊と他の軍隊の戦いではなく，ある国民の他の国民との戦いとなった．それとともに女も子供もその対象になった．彼らも敵の一部になったからです．戦争は社会全体に拡大したのです．しかし，第二次世界大戦においては，それはより極端でした.」

11)「なにが原因だったのでしょう？」

――「社会の変化があった。より強い政治化，政治的関与があった．それはフランス革命まで溯ります．その時代，住民と支配者の関係は新たに設定された．権力者は選挙されるようになった．そのことにより，住民は国を守る責任を与えられた.」

12)「あなたは『思想と感情は民族的境界を乗り越えた』と言っていますが，それはどういう意味ですか？」

――「『ドイツ人はオーストリア人あるいはロシア人とは違う』と言うことは間違いです.（当時は）社会ダーウィニズム，ナショナリズムあるいは革命的な諸イデオロギーがあった．それらは一つの国（土地）と結びつくものではなく，（むしろ）ヨーロッパ社会と関連づけられていた．大英帝国には次のようなテーゼがあった．すなわち，ドイツ人は社会ダーウィニズム的な野望から戦争を欲したのだと. それは間違いです. そうした野望は全ヨーロッパにあったのです.」

13)「第一次世界大戦の後にはしかし，共産主義，ファシズムそしてナショナリズムが現れます .」

――「ナショナリズムは大戦の原因でもあり同時にその結果でした．共産主義とファシズムもいずれ出て来る可能性があった．その思想はすでに前から存在していたから．しかしそれらは戦争を通じてより人々を惹き付けるようになった．ファシストの多くが，そして共産主義者の多くも，軍隊を通じて社会化し，軍隊的な秩序に組み込まれた．二つのイデオロギーは極めて軍隊的に組織された．社会は戦争を通じて野蛮なものになった．それ以前は，住民は一定程度安定した状態にあった．その生活は一夜のうちに変化してしまいました.」

14)「第一次世界大戦は第二次世界大戦のどの程度影響を与えましたか？」

――「第一次大戦は直接第二次大戦を導いた訳ではない．しかし，それは確実に後者の前提となった．ドイツはそのトラウマに捉えられていて，不安定な共和国であった．それらが全てアドルフ・ヒトラーを後押しした.」

15)「そしてナチスを強化した？」

――「ドイツはそれ以前に既にナショナリスティックであった．しかし第一次世界大戦はドイツをナツィオンとして傷つけた．人々は敗北を受け止めなかった．世界恐慌もまた，第二次世界大戦の非常に重要な要因

であった．それを通じて人々は共産主義やファシズムのような極端な主義者となった.」

以上のような，ヨーロッパにおける第一次世界大戦をめぐる議論は，それに引き続き起こった第二次世界大戦を超えて，現代ヨーロッパの歴史に規定的影響を与えていることを示している．ヨーロッパの歴史家たちは，第一次世界大戦を，そしてその起点となったサライェヴォの事件を，現代ヨーロッパの状況と敏感に結びつけて回想しているといってよい．

次に，本屋の店頭に並べられた「サライェヴォ事件100年」に関連する書籍の中から気になって手にした二冊の本を紹介してみよう．

G. イェリネック『素晴らしき日々』

少々センセーショナルなタイトルを付けて，新聞にもとりあげられたのは，G. イェリネックの『素晴らしき日々．1914年．新年から第一次世界大戦の勃発まで』(Gerhard Jelinek, *Schöe Tage. 1914, Vom Neujahrstag bis zum Ausbruch des Ersten Weltkrieges*, Wien: Amalthea, 2013) である．イェリネックは「1914年の始まりは，ベルリンやパリ，ロンドン，サンクトペテルブルク，ローマそしてとくにウィーンにおいては人々はまったく静穏で平和な世界にいると感じていた」と書き始め，その実例として，シュテファン・ツヴァイクの『昨日の世界』を引き合いに出す．「それは平和な黄金時代であった．誰もが自分の財産がどのぐらいか，どのぐらいを稼げるか，何が許され何が禁止されているかを知っていた．皆が自分の規範をもち，自分の基準を持っていた．野蛮な行為の再発，ヨーロッパ諸国間の戦争など，人々はこれっぽっちも信じていなかった.」と．そしてイェリネックは1914年の日々の歴史を同時代のさまざまな人々の日記や記録を積み重ねて描いていく．そこには，シュテファン・ツヴァイクの他に，ココシュカやシュニッツラーの日記や記述，あるいはサッカーの試合，自動車レースの記録など，極めて日常的な生活や出来事が記録されていく．そうした平和な何事もない時の流れの中で6月28日にサライェヴォの暗殺事件が起きるのである．その日にシュニッツラーは妻のオルガと兄弟のハインリヒとともにウィーンの森のソフィーエンアルプにピクニックに出かけていて，午後になって日記に次のように記録している．「さて，ユリウス（・シュニッツラー）が電話をよこして，フランツ・フェルディナントとその妻がサライェヴォで撃たれた．詳しくは・・・」と．そして最後に「素晴らしい夏の日」とつけくわえている．勿論この「素晴らしい夏の日」とは，ちょうど始まったばかりの夏の休暇の天気のことをいっているのだが，それがこの本のタイトルに使われ，別の意味が付与されているのである．現実にも，夏の休暇の始まりの週末に，この事件のニュースは徐々にしかひろまらなかったという．皇帝自身も休暇で滞在していたバート・イシュルでの昼飯時にその知らせを受け取り，翌日の朝早くにウィーンにもどり，娘のヴァレリーと会う．彼女は後に書いてる．「パパに会う．驚くほど快活だった．確かにパパはがっくりしていたが，個人的には思ったほど困った様子ではなかった」と．皇帝のフランツ・ヨーゼフが実の息子のルドルフを失い，皇室に相応しくない低い身分のソフィーを妻としたフランツ・フェルディナントを後継者として好ましくないと思っていたことは事実で，そのことがこの暗殺が，皇帝に同情する国民の大きな憤激や関心を生まなかったと言うのが，これまでよく語られてきた説明である．しかしそれだけでは，この暗殺事件の前後，人々が平和に「素晴らしい日々」を送っていたかを説明することはできないだろう．そして，そうしたなかで，「それにも拘らず」戦争に突入してしまったのかも説明できないであろう．イェリネックは，その前後の日々において二重帝国の人々が，日常と変わらず「素晴らしい日々」を十分に楽しんでいた様子を描き，人々が戦争が起こるなどとは少しも考えていなかったことを強調する．政治に関心を持つ人々も，直前に起こった第一・二次のバルカン戦争が首尾よく収められたので，今回の事件もその続きとして，解決されるだろうと考えていたとみられる．軍隊も兵士の多くが収穫

休暇で家に戻ってしまい招集が難しいという事態もあった．皇帝のフランツ＝ヨーゼフも，これまでの全ての戦争に敗北していて，気乗りがしていなかった．

そうした状況のなかで，結果的に戦争が起きてしまったのはなぜか．二重帝国の外交責任者は二人しかいなかった．皇帝とレオポルト・ベルヒトールトだけで，ベルヒトールトは，フランスとイギリスに対する交渉を終えると，7 月 23 日夕刻に大使を通じてセルビアに 24 時間の期限付きの最後通牒を手渡した．その日に二重帝国の天気は大きく崩れ，雷と落雷によりハンガリーでは 10 人の死者がでて，それまでの「素晴らしい夏の日」は終わりを告げた．セルビアはほとんどの要求に従ったが，最後の一項目は実質的に飲めず，25 日夜に両国の関係は断絶し，それぞれが総動員をかけた．ベルヒトールトは皇帝にセルビア国境での限定的戦争であるとして，皇帝の誕生日である「8 月 18 日までに我々はセルビアの全てを占領しているであろう」と説得し，7 月 28 日に皇帝はセルビアへの宣戦布告に署名した．皇帝の信頼を受けていた女優のカタリーナ・シュラットは述べている．「皇帝はバート・イシュルで対セルビア戦争のみを考えていた．そして『それなら私はウィーンに戻る必要はないな』と述べた．その後ドイツがロシアに宣戦布告したとの知らせが入ると，皇帝は非常に驚いていた」と．こうして戦争は国民や皇帝でさえしらないところで，彼らの予想や恐れを乗り越えて，「官僚的に」また国際関係の縛りのなかで世界戦争に発展していってしまうのである．

サライェヴォ事件から第一次世界大戦の勃発までのこうした展開を追っていくことによってようやく，この本の著者イェリネックが「素晴らしき日々」と言うタイトルを採用した意図があきらかになる．イェリネックは二重帝国の国民が何も考えずに「素晴らしき日々」を過ごしている間に，国民に何も知らされないなかで国家の上層部で官僚的に戦争が準備され，国際関係の中でさらにそれが拡大されていく「とんでもない日々」が展開していくことを皮肉なしかし危険な現実として描こうとしたのである．それは，現在の日本の状況にも反映されうるものであろう．安倍首相がアベノミクスなどという架空の経済発展の道筋をぺらぺらと述べ，経済成長という「素晴らしき日々」を約束し，その陰で集団的自衛権の限定的行使を独裁的官僚的に決定しようとしている．そしてそれが安保条約の枠に縛られ世界戦争に繋がりかねない危険を内包していることは国民にあきらかにされない．そうした意味で，サライェヴォ事件とその後の「素晴らしき日々」はわれわれに大きな警告を与えているといってよいであろう．現実をしっかり捉えなければならない．

B. ハーマン『第一次世界大戦』

もう一つちょっと期待して覗いてみたのは，『ヒトラーのウィーン』によって歴史家として名を挙げ，その後，オーストリア人とは多少異なる視点からのオーストリアの歴史をさまざまに分析してきたブリギッテ・ハーマンの『第一次世界大戦。写真や文章における真実と嘘』(Brigitte Hamann, *Der Erste Weltkrieg: Wahrheit und Lüe in Bildern und Texten*, Müchen: Piper, 2014) である．

このハーマンの著作は，実は 2004 年に書かれたもので，100 周年を機にペーパーバックスとして再販されたもので，多くの写真や絵はがき，ポスターなどを含み，サライェヴォ事件から第一次世界大戦の時期全体を扱い，この戦争の体験者や生き証人がいなくなり，史料の多くも失われた段階での歴史の描き方の一つの方法をも示していている．

ハーマンがこの本を書く動機となったのはまったく個人的なものであったという．ハーマンは「我々の家族史料，とくに連れ合いの父親のヴァルター・ハーマンの残された手紙や書類を整理していたときにこの本の発想がうまれた」と序文に書いている。ヴァルター・ハーマンは 1914-1918 年に中尉として大戦に参加し，多くの写真や戦争日記，手紙などを残していたのである．そうした史料を整理し読みながらハーマンは「第一次世界大戦という非常に難しいテーマに対する関わり合いには，歴史への個人的関わり合いがいかに重要であり，内容のあ

るものであるかを悟った」というのである．第一次世界大戦に関する学問的，軍事史的研究はたくさんあるが，こうした同時代の個人的史料も，戦争の当事者ないし被害者として，その証人となりうるというのである．ハーマン中尉の個人的遺品には，手紙やはがき，日記などだけではなく，当時の新聞やビラ，写真やプラカード，プロパガンダカード，カリカチュア，食料配給カード，子供の絵本やおもちゃ，料理本，「私は鉄のために金を差し出します」運動で集められた鎖や指輪などがあった．とくにおおきな部分を占めるのは色付きの絵はがきであり，それらは当時の時代精神を色濃く反映し，大部分が戦争を賛美し，勝利を誇張宣伝し，戦争の危険性を糊塗し，愛国心を鼓舞しようとしたものである．「そうした虚偽の，少なくとも部分的な情報は，人々が実際の戦争の現場に対する幻想が如何におおきかったかを示すものである．」「こうしたすべての領域で行われた戦争宣伝は，その規模からいえば，第一次世界大戦において初めて行われたものである．それはまさにこのときに大量宣伝の技術が新たに可能になったからであり，それはさらに洗練された形で今日でもあらゆる戦争で利用されている．今日では人々はプロパガンダの危険性を知っているが，1914-1918 年の当時は，大抵の人々がそうした仕組みを知らずに，書かれたことを信じてしまっていた．」「歴史家は，世界中に拡がったさまざまな無限なテーマに対して，ただ断片的な出来事を主観的な視点により選択し提示でることしかできないことを十分に心得ている．『20 世紀の激動の大元』であるとされるこの戦争に関しても，シュニッツラーに言わせれば「百万分の 1 の百万番目の一つ」にすぎないだろう」とハーマンは謙遜しながら，この本の特徴を次のように強調する．

> 「この本の中心を占めるのは戦闘ではなく，感覚と日常をもった人々である．すなわち（歴史的に）初めて武器として，「戦争の道具として」動員された何百万の人々，さらに，この最初の総力戦の「故郷の前線」で，飢餓や疫病，労苦や悲しみ，絶望に苦しんだ人々である．」

そうした人々を中心にこの大戦を描くためには勿論彼女の家族的資料では不十分であるので，ハーマンは「二人の重要な時代証人」を選んでいる．一人はウィーンの文筆家で医者のアルトゥール・シュニッツラーであり，彼は 10 巻に及ぶ日記をのこしているからである．もう一人はベルリンの芸術家ケーテ・コルヴィッツで，彼女は「信頼のおける批判的な時代記録者」であった．その他にもハーマンはフィリップ・ヴィットコップの編集した『戦死した学生たちの手紙』やドイツテレビのシリーズフィルム「戦場からの手紙」を使用している．しかし，この本の骨子をなし，その面白さと説得力をもっているのは，ハーマンの家族的資料の中心である絵はがきやプロパガンダパンフレットであり，それらはまさに戦争の底辺を描き，其の実相をえぐり出しているといえるのである．そうした意味で，この著作は，生き証人のいなくなった時代の歴史研究の一つの方法として，その後の 100 周年の記念研究出版物にも影響をあたえたといってもよい．上記のイェリネックの著作もその一つであると言えよう．

ということで，サライェヴォ 100 年（＝第一次世界大戦 100 年）における歴史認識のあり方は，必ずしも新しいものではないとしても，現代のさまざまな現象を反映し，その資料的限界に規定されて，少しずつではあるが，位置をずらしてきているという印象を受ける．

（ますたに　ひでき　東京外国語大学名誉教授）

文献紹介　最近の第一次世界大戦研究から

木村 真

第一次世界大戦開戦から 100 年を経過した今年、世界各地でそれを記憶する式典や催しが開催されている。多くの地域のメディアがその特集を組み、その中には新たな光を当てようとするものもある。たとえば、朝日新聞では「サラエボ 100 年をたどって」と題する 8 回にわたる連載記事が、毎日新聞では「第一次世界大戦研究」と題する月に一度の特集記事が掲載されている*。歴史研究の分野でも第一次世界大戦をテーマとする学術的会議の開催や出版物の刊行が相次いでいる。日本においてもこうした傾向は確認できる。一例を挙げれば、政治経済学・経済史学会の春季総合研究会は「第一次世界大戦開戦原因の謎――国際分業が破壊されるとき」をテーマとして発表・討論が行われた。学術出版に目を向ければ、単著として、井上寿一『第一次世界大戦と日本』（講談社現代新書 2266、2014 年 5 月）や木村靖二『第一次世界大戦』（ちくま新書 1082、同年 7 月）がすでに刊行されている。一方、複数の執筆者による論集として刊行されたのが、京都大学人文科学研究所の共同研究「第一次世界大戦の総合的研究」に集った研究者による『現代の起点――第一次世界大戦』（全 4 巻、岩波書店、同年 4 月～ 7 月）である。本稿では学術論文集である同書を取り上げ、最近の研究動向の一側面を紹介する。

同シリーズは全 4 巻からなる。各巻のテーマは「世界戦争」「総力戦」「精神の変容」「遺産」である。各巻 4 部構成で 10 の論説、3 ～ 6 のコラムが収められている。第 1 巻巻頭には本シリーズの総説が、第 4 巻の最後には、それを引き受ける形でシリーズ総括が配置されている。シリーズ全体の総説「世界戦争への道、そして「現代」の胎動」において、編集委員の一人、山室信一は、本論集の課題を「日本に焦点をあてるだけでなく、アジアを視野に入れることによって」、「これまで自明視されてきた第一次世界大戦は「ヨーロッパ大戦」にすぎないという見方に対して「ヨーロッパの外から見た大戦」を対置し、それによって第一次世界大戦の「世界性」の意義を改めて問い直すことと位置づける。続けて、「第一次世界大戦を日本とアジア、ヨーロッパ、アメリカそしてイスラーム世界やアフリカといった空間範域間の相互交渉過程のなかで捉えたい」と述べる。さらに、第一次世界大戦がそれを経験した諸地域における、戦争と平和に対するスタンス、政治、経済、文学、芸術、学知、そして生活世界のありように、総体としていかなる衝撃を与え、それが現在に至るまでいかに持続しているのか明らかにすることを期してきたと記している。すべてを第一次世界大戦に還元するのではなく、上述の「世界性」「総体性」「持続性（現代性）」を基軸として検証しようというのである。本論集に収められた論説とコラムは山室の指摘するように「多彩なグラデーション」を示しているが、上述の基軸を意識することによって個々のテーマに迫るものと言えよう。総説においては、世界の一体化や情報伝達と戦争の世界化、戦争宣伝などの問題が言及され、第一次世界大戦の諸相のうちに「現代の起点」をみる姿勢が示されている。

論説・コラムのテーマは多岐にわたり、そのそれぞれをここで取り上げることはできない。ここでは紹介者の関心に沿っていくつか紹介したい。

第 1 巻〈世界戦争〉は、「ヨーロッパ戦線と世界への波及」（総説）、「諸民族の大戦経験」「日本の参戦」「アジアへの波及」の 4 部構成である。「ロシアとオスマン帝国における動員と強制移住」、「インド民族運動の転換」、「中国ナショナリズムと第一次世界大戦」、「東南アジアにおける第一次世界大戦」といった論説は世界戦争の諸相をヨーロッパ周辺地域やアジアの事例研究から明らかにする好例となっている。

第 2 巻〈総力戦〉は、「戦争を生きる」（総説）、「兵士と戦場」「戦争を支える社会」「女性の戦争」の 4 部か

らなる。捕虜と総力戦の問題を取り上げた「収容所を生きる」、総力戦を支えるシステム「戦債と社会――第一次世界大戦と「公債の民衆化」」、「銃後における健康と医療」、「こころの動員――包摂装置としての戦争精神医学」、「女性であること、兵士であること」、「食糧生産を支える女性たち」といった論説は個別の事例研究でありながら、他の地域、他の事例との比較を可能にし、総力戦の諸相についての最新の研究と言えよう。

第３巻〈精神の変容〉の総説「「芸術」の崩壊と大衆文化――近代から現代への越境」においては、この巻の狙いをハイカルチャーにおける戦争の刻印を意識することによって「世界文化におけるヨーロッパ中心主義やエリート主義の崩落、アメリカニズムの台頭、大衆文化の二〇世紀の始まり」を浮かび上がらせることと位置づけている。そして「文化における大戦期」として、1905年から1925年あたりまでが想定されている。総説に続いて、「参加の芸術／芸術の自律」「物語りの断片化と再統合」「西欧の没落」の３部が続く。なかには歴史家マルク・ブロックを取り上げる「マルク・ブロックの戦場――戦争経験と歴史的学知の変容」と題する論説も収められている。

第４巻〈遺産〉は第一次世界大戦を「未完の戦争」として捉え、その遺産を跡付ける論説が並ぶ。小関隆は総説「未完の戦争」において、戦後も続いた戦争、戦後社会の「野蛮性」あるいは「暴力の浸透」、戦争目的の不達成といった戦争が終わらない諸相を指摘する。総説を受けて、暴力の連鎖、「戦後」の模索、現代の胎動の３部が続き、最後にシリーズ総括（「世界性、総体性、現代性をめぐって――振り返る明日へ」）を山室が執筆している。「「自決」と報復――「戦後の戦争」としてのアイルランド独立戦争」、「暴力の行方――革命、義勇軍、ナチズムのはざまで」、「ユダヤ移民とパレスチナ問題」、「ヨーロッパ統合にむけて――起点としての第一次世界大戦」、「帝国ソ連の成立――南コーカサスにおけるロシア帝国の崩壊と再統合」といった文字通り現代性、持続性をもつテーマが論じられている。

各巻の総説には主要な参考文献が挙げられ、読者の関心に応えるとともに、研究史を回顧する一助となっている。また論説の間におかれたコラムからは、限られた紙幅で幅広い個別の事例を取り上げ、第一次世界大戦の持つ多様な諸相を、とりわけこれまでの研究史が注目してこなかった事例を積極的に取り上げようとする執筆者の意思が感じられる。

なお、個々の論説の独立性が高いことはもちろん承知の上ではあるが、同じシリーズのなかで地名の表記統一が図られることで、個々の論説の価値が下がるものではないと考える（たとえば、「サライェヴォ」と「サラエヴォ」）。

＊「サラエボ100年をたどって」（全８回）、『朝日新聞』夕刊、2014年７月７日～11日および14日～16日、２頁；「第一次世界史研究――現代史と国際政治の原点」（連載中）、『毎日新聞』夕刊、2014年４月28日、５月26日、６月23日、７月28日。また、『日本経済新聞』の「第１次世界大戦の教訓（上下）」（2014年７月17日～18日）のほか、サライェヴォ事件が起きた６月28日、第一次世界大戦の開戦日とされる７月28日の前後には、主要各紙に関連の特集記事が組まれた。

〈雑感〉アジアにとっての「第一次世界大戦」

南塚 信吾

これまでの我が国における第一次世界大戦の論じ方を見ていると、歴史学のこれまでの成果はどこへ行ったのかと、首を傾げたくなってしまう。第一次世界大戦については、第二次世界大戦後、様々な角度から論じられてきていたが、近年の論じ方からはそういう先行研究が一切なかったかのように感じら

れる。最近の第一次世界大戦論においては、おそらく戦争と国民との関連がいっそう社会史的・文化的に精緻に議論されるようなったことが新しい点なのであろう。これはもちろん重要な論点ではあるが、より構造的な議論が抜けてしまっては、逆の効果がでてしまうようにも思われる。

第一の問題として指摘すべきは、第一次世界大戦がいわばヨーロッパ中心の「国際政治」の問題として論じられていることである。たとえば、戦争の原因はどの国の政策に問題があったのかという議論や、同盟関係が有効に機能したのかしなかったのかという議論、あるいは、1914 年 6 月 28 日のサライェヴォでのオーストリア帝位継承者の暗殺の問題も、オーストリア側とセルビア側とが権力の正当化のためにそれぞれの扱いをしているという議論が広く行われている。いわば今日への教訓を「技術的」にくみ取ろうとしているのであろう。

ふりかえってみると、江口朴郎らの研究は、第一次世界大戦を全世界的な帝国主義の問題として論じていて、列強がさまざまな同盟関係を結んで、世界全体を組織しようとしているかに見えながら、結局は組織できなくて、組織できない部分に狂信的な運動を許し、それを抑えきれないで、大戦に至ってしまったという構造的な指摘をしている。こういう見方こそ、今日の教訓になるのではなかろうか。戦争は政治の継続であって、同盟や外交の操作の問題ではないのである。

第二に、『現代の起点――第一次世界大戦』（全 4 巻、岩波書店、2014 年）を別にすれば、最近の議論には、第一次世界大戦をアジアの視角からみるという点が全くなくなってしまっている。第一次世界大戦がなぜ「世界」大戦なのかと問えば、それはひとつには、ヨーロッパの戦線に、エジプト、インド、ベトナムなどの「植民地」から多数の兵士が動員されていたからである。ある意味ではアラブの兵士も戦争に動員されてしまった。もっと言えば、ユダヤの人々も、その金融資本が大戦に動員された余波で、戦争にコミットすることになった。こういう点はすでに歴史学は指摘をしてきているのだが、いまやそういう議論の蓄積は全く生かされていないと言わざるを得ない。

同じく、第一次世界大戦をアジアの視角からみたさいの問題として、大戦と日本の関係が論じられるべきであろう。アジアにおける「第一次世界大戦」は、日本が日英同盟の誼 (よしみ) をもって参戦し、ドイツの権益を戦い取り、列強が介入できない情勢に乗じて、中国に対して「対華 21 カ条要求」を突き付け、ロシア革命に付け込んでシベリアに出兵したものであったことが指摘されてきた。これこそ、大戦が「世界」大戦であった今一つの理由なのである。最近の議論では、こうした問題はいっさい考慮されず、ヨーロッパの国際政治の問題として限定され、他人事のように論じられているのである。

＊＊＊

そもそも、第一次世界大戦はどういう意味で「第一次」の「世界大戦」なのだろうか。世界的な意味での大戦という意味では、すでに「クリミア戦争」が世界的であったのではないだろうか。英仏とロシアは極東においても戦っているわけだから。それはヨーロッパが戦場にならなかったから「世界大戦」ではないというのだろうか。あるいは、「日露戦争」こそが世界大戦ではないのだろうか。これはまさに英米と仏独の東アジアにおける「代理戦争」でもあったわけだから。これもヨーロッパが戦場ではなかったから「世界大戦」ではなかったというのであろうか。

さらに考えて、「第一次世界大戦」はアジアの民衆のレベルにおいても「第一次」「世界大戦」なのだろうか。たしかに、権力政治のレベルで見れば、アジアにおける「第一次世界大戦」は、日本が日英同盟の誼(よしみ)をもって参戦し、ドイツの権益を戦い取り、列強が介入できない情勢に乗じて、中国に対して「対華 21 カ条要求」を突き付け、ロシア革命に付け込んでシベリアに出兵したものであった。しかし、それはヨーロッパ中心の「権力政治」的な「世界大戦」論からすれば、大戦の「周辺」アジアでの「付け足し」的な動きにすぎない。アジアの諸地域の民衆から見ると、それよりももっと「大戦」というべき事態があったのではないだろうか。

アジアの民衆から見るならば、「第一次世界大戦」は、日本が日英同盟の誼(よしみ)で参戦し、その中で中国に対して「対華 21 カ条要求」を突き付けたというだけのものではなかった。「第一次世界大戦」は、「韓国併合」以来の日本のアジア支配の飛躍的拡大と深化の一貫した過程の頂点なのであった。「併合」後の韓国におけるような、現地住民の価値観までも掘り崩すような植民地支配が、広がろうとしていたのである。その一つの表れが「対華 21 カ条要求」であり、「シベリア出兵」であったにすぎない。そのような日本の動きに象徴されるような帝国主義への民衆の対抗が、アジアにとっての「第一次世界大戦」なのであった。したがって、この戦争は、1914 年に始まって 1918 年に終わった戦争ではなかった。そうではなくて、「韓国併合」の 1910 年に始まった戦争であり、1922 年の日本のシベリア出兵からの撤兵をもって終わった戦争であったというべきではなかろうか。

この十数年は、日本にとっても、東アジアの諸地域の権力や民衆にとっても、重要な転機をなしていたのである。第一次世界大戦は東アジアとは無関係の「よそ事」と考えては意味がないのである。

＊＊＊

第一次世界大戦についての歴史的研究が指摘してきた今一つの重要な論点は、平和の意識という問題である。これはもっぱら江口の指摘したところであった。

第一次世界大戦は、西ヨーロッパの人々の中には、戦争への深刻な思想的転換をもたらした。たとえば、フランスのロマン・ロランらの反省が指摘されてきた。そうした反省が、徐々にヨーロッパの協調の流れに結実していくのである。これに対して、アメリカ合衆国や日本はいわば「漁夫の利」を得たのであった。両国はその領土上での直接的な戦闘はなく、むしろ経済的、領土的に得ることが多く、第一次世界大戦を機に、戦争と平和という点で深刻な反省をすることはなかった。このことが、その後の世界史に大きな影響を与えるのであり、日本は第二次世界大戦、アメリカはベトナム戦争をもって、ある程度の転換が生まれざるを得なかったとされてきた。

近年の第一次世界大戦論においては、このような論点は完全に無視されていると言わざるをえない。戦争技術や情報操作の違いなどを考慮して、西ヨーロッパ以来の「反省」の質を検討しなおす必要が出ているように思われるのである。戦争と国民の関係はこういう議論を批判し発展させる方向で論じられるべきではなかろうか。

＊＊＊

最後に、第一次世界大戦がその長期にわたる戦争の間に、さまざまな新しい問題を生み出したことにも注意が向けられなければならない。思いのほかに長引いた戦争を遂行するために、イギリス、フランス、ロシアの協商国は、オスマン帝国を攻撃するために戦後の独立を約束しつつアラブ諸民族を動員し、ユダヤ資金を獲得するためにユダヤ人の「ホーム」を約束したのみならず、戦後における中東の領土分割をお互いに約束したのだった。これらの問題が今日においては中東の人々が自ら解決するにはあまりにも重い世界史の大問題となっているのである。

また戦争中には協商国の中で最も脆弱なロシアにおいて、戦争の遂行に国民が疑義を唱え、ついに革命が起きて戦争の過程そのものに重大な影響を与えただけでなく、戦後の世界に「社会主義」政権を生み出すことになった。このロシア革命はレーニンやボリシェヴィキの「悪魔」が生み出したのではなく、大戦の全体構造の中で理解されなければならないであろう。

最近の第一次世界大戦論はこのような総合的な観点を欠き、非常に限定された視野の中で、新しい局面を見ようとするものである。それはまさに現代の思想状況を映し出してはいるが、現代を歴史的に相対化して見ようというものではないように思われる。

お知らせ

RIWH アフリカ奨学金（第二期）

前号でお伝えした「RIWH アフリカからの世界史賞」受賞者 3 名の方に、本年 5 月、イロリン大学人文学部歴史および国際研究学科にて、賞状と奨学金の授賞式が行われました。授賞式の写真など、詳しくは研究所ホームページでご紹介いたします。

受賞者の Kodili さん（一番左）、Oluseun さん（中央）、Kolade さん（その右）

追悼 鳥越泰彦さん

世界史研究所会員で、世界史教育とその研究に熱心に取り組んでこられた鳥越泰彦さんが、本年 3 月 29 日、48 歳の若さで亡くなりました。ご冥福をお祈りいたします。

当研究所の活動にも大きな関心を持ってくださっていた鳥越さんを偲ぶ欄を、ホームページに設けました。以下の日付の URL に、ご本人の業績と親交の深かった会員諸氏からいただいた追悼文が掲載されています。

鳥越さんを偲ぶ（2014 年 7 月 11 日付）
http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/japanese/index.php?itemid=218

本ニューズレターへのご寄稿は随時承っております。
文献紹介、研究情報など、世界史に関するご投稿をお考えの方は、当研究所までご連絡ください。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2014 年 07 月 28 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.history.l.chiba-u.jp/~riwh/

スタッフ
所　長　南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問　下村 由一（千葉大学名誉教授）
　　百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員　木村 英明（早稲田大学講師）
　　木村 真（日本女子大学講師）
　　姉川 雄大（千葉大学特任助教）
　　崎山 直樹（千葉大学特別研究員）
　　鹿住 大助（島根大学講師）
特別研究員　稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
　　近藤 正憲（学術博士）